報告　三

武人の物語と現実社会の動き ―環流する虚構と現実―

松浦　智子

はじめに

武人や武事など「武」に関わる題材を扱う物語には、『三国志演義』や『水滸伝』のように広く読まれ、現在に至るまで大きな影響力を持つ作品が少なくない。このことは、興亡の歴史や戦争、荒くれ者たちの生き様といった「武」を描く娯楽が、本来的に人の感性に訴えかける要素を備えていることを示しているだろう。

一方、これらの物語は「武」を一つの大きなテーマとしている以上、武人や武官など現実社会において「武」に関わる人々と、親和性の高い存在だったと考えられる。実際、明代後期に『三国志演義』や『水滸伝』が書籍化された際には、その一端に、武人・武官や、武官と関係の深い文官や宦官などが関与していたことが、本シンポジウムでも小松謙氏や井口千雪氏によって指摘されている。そして、これに近似する現象は、楊家将や岳飛など宋の武人の物語の形成・受容の過程にも見える。

一、岳飛の物語と宦官と絵物語

（1）『会纂宋鄂武穆王精忠録』

まず、岳飛の物語の形成・受容過程から見てみると、『会纂宋鄂武穆王精忠録』附図（以下『精忠録』）という資料が注目される。これは、文人がなした岳飛に関する伝や詩文などを絵図とともに収載した資料集である。ただし、岳飛を描く小説『大宋中興通俗演義』（以下、『大宋』）に、『精忠録』の絵図と内容を踏まえた形跡と、『会纂宋鄂武穆王精忠録後集』（以下『精忠録後集』）という附録が残されていることから、岳飛物語の書籍化と深い繋がりをもつ資料として白話文学の研究領域で着目されてきたものである。(一)

『精忠録』の出現には、正統十四年（一四四九）に英宗が「北虜」のエセン率いるオイラート軍に拉致された土木の変が関係している。『精忠録』『精忠録後集』の記載によれば、この事件をきっかけに湯陰に派遣された徐有貞（初名は徐珵。一四〇七～七二）が

当地に岳飛廟を創建し、その行為を称揚するために湯陰典教の袁純が『精忠録』を作ったという。[二]

その後、『精忠録』は岳飛廟との関わりのなかで、宦官によってくり返し重刊されていく。岳飛廟は湯陰の他に、杭州西湖の畔にあることが良く知られるが、この杭州の岳飛廟・墓は、弘治十三年（一五〇〇）に鎮守浙江太監の麦秀に、正徳五年（一五一〇）に鎮両浙太監の劉璟に、正徳十二年（一五一七）に浙江鎮守太監の王堂によって、修繕されている。そのうち麦秀と劉璟は、岳飛廟・墓の修繕と連動して『精忠録』を絵図付きでそれぞれ重刊し、自分とその周囲の宦官たちが岳飛廟・墓を修繕したことを宣伝しているのである。[三]

（2）〔明内府〕彩絵鈔本『大宋中興通俗演義』

このように、岳飛の小説『大宋』の成立の一端には、土木の変という現実の武事と宦官が関わっていた。そしてもう一つ、岳飛の物語と宦官の繋がりを示す、〔明内府〕彩絵鈔本『大宋中興通俗演義』（中国国家図書館蔵。以下、彩絵『大宋』）という資料がある。白綿紙に四周双辺手鈔紅格、対向双紅魚尾、上下粗紅口という内府鈔本に特徴的な体裁と、数十種類の色料で丁寧に描かれた多数の彩色挿絵をもつこの資料は、他の明代内府制の彩絵鈔本との比較検証から、明内府制と推定されるものである。一方で、そのテキストと挿絵の両脇に附される対聯形式の画題は、万暦前期の坊刻本『大宋』（〔金陵周曰校〕万巻楼仁寿堂刊本および建陽余象斗双峰堂覆万巻楼刊本）と一致し、挿絵の構図も坊刻本からの影響が見て取れるものとなっている。[四]

翻って、明末の宦官・劉若愚（一五八四～？）『酌中志』巻一「憂危竑議前紀」には、万暦帝の時代に宦官を介して、民間の書肆から内府へ「小説」「出像」[五]「曲本」を含む複数の書物が買い入れられていた、との記述が残る。このことと、『大宋』の種本の一つである『精忠録』が宦官によって何度も重刊されていたことを併せて考えると、彩絵『大宋』は、明内府で宦官の関与のもと、民間書房から買い入れられた坊刻本『大宋』に基づいて制作されたものであったと推定できるだろう。

これを裏付けているのが、彩色鈔本を作る材料（紙、筆、墨、硯、書籍他）と、宮中の絵画制作を担当していた「画院」や画工を管理していたのが、宦官の衙門である司礼監や御用監であったということである。[六] さらに、「画院」の画工には、錦衣衛の指揮・鎮撫・総旗などの武官の官職が与えられることが多かった。[七] この錦衣衛も宦官と繋がりの深い組織であり、かの悪名高い宦官の衙門・東廠は、貼刑以下の実働部隊を錦衣衛から選抜して成り立っていた。そして、東廠の外署の小庁には、岳飛の姿を描いた軸が掛けられていたという。[八]

ここで注目されるのは、彩絵『大宋』は、杭州の岳飛廟・墓の明代当時の様子を、視覚から感性に働きかけつつ情報を伝える彩色絵図と、読解の難易度が比較的低い通俗小説の叙述で細かに紹介している、ということである。この点に鑑みれば、くり返し岳飛廟・墓の修繕を行い、『精忠録』を刊行してきた宦官たちにとって、彩絵『大宋』は、自身の行いを上級から中・下級の識字層にまで広く

宣伝するうえで格好の道具となっていた可能性が指摘できるだろう。(九)

二、楊家将の物語と武人の宗族と絵物語

(1)〔明内府〕彩絵鈔本『出像楊文広征蛮伝』

さらにもう一つ、明内府で宦官らの関与のもと作られたと思しい武人の物語がある。〔明内府〕彩絵鈔本『出像楊文広征蛮伝』(東洋文庫蔵。以下、彩絵『征蛮伝』)という楊家将の彩絵本である。この彩絵『征蛮伝』も、彩絵『大宋』と酷似する明内府鈔本の体裁と彩色絵図をもっており、全葉に数十種類の色料で描き込まれる彩絵の上には、楊文広・楊宜娘の世代とその次世代が南蛮征伐＝征南や西霞(西夏)征伐＝征西などで活躍する物語文が金字で書き込まれている。(一〇)

彩絵『征蛮伝』の制作の経緯を考える上で手がかりとなるのは、播州楊氏が万暦年間に起こした楊応龍(?～一六〇〇)の乱の顛末を描く万暦三十一年(一六〇三)重刊『征播奏捷伝通俗演義』(以下、『征播』)の第十七・十八回に残る注釈である。そこには、楊文広・楊宜娘の南征物語を描く坊刻本『征蛮伝』(佚)が、当時の民間書肆から出されていただろうことが記されているのであるそして、彩絵『征蛮伝』は彩絵『大宋』と酷似する明内府鈔本に特徴的な体裁・彩絵を持っており、さらに、上述の如く万暦帝の内府には坊刻の「小説」「出像」「曲本」などが買い入れられた。これらのことを併せて考慮すれば、この作品も坊刻本『征蛮伝』(佚)に基づいて明内府で宦官らの関与のもと制作されたものであった可能性が高いと言えよう。(一一)

ここで注目されるのは、播州楊氏について描く『征播』が、わざわざ楊家将の楊文広・楊宜娘らによる南征の物語に言及しているという点である。これには、明代当時、播州楊氏が楊家将と関係する一族だと広く認識されていたことが関係している。

(2)播州楊氏と楊家将の物語

播州楊氏はもともと西南地方の武人一族で、楊業ら太原楊氏とは無関係の宗族であった。だが、元代になると、彼らは自己の宗族の地位を上げるべく、姚燧(一二三八～一三一三)、程鉅夫(一二四九～一三一八)、袁桷(一二六六～一三二七)、柳貫(一二七〇～一三四二)ほか多数の高級文官とのつきあうなかで、系譜を捏造して太原楊氏つまり楊家将の末裔を自称するようになった(程鉅夫『雪楼集』巻一六「忠烈廟碑」)。

一方、播州楊氏は、北宋の時に「南蛮」の儂智高征伐に従軍した、という一族内伝承をもっていた(南宋「楊文神道碑」)。元の当時、宋隆盛、蛇(折)節、桑柘、蘆犇など西南諸族が起こした反乱の討伐に関わっていた彼らは、一族に伝わる儂智高征伐での戦功を絵画化し、それに高級文人から題詩をつけてもらうことで、北宋と元代当時の戦功をともに喧伝しようと図った。柳貫「黄宗道『播州楊儀娘独騎図』」(『待制集』巻六)や袁桷「黄宗道『播州楊氏女』」

（『清容居士集』巻四五）がその様子を示しており、これらの過程において、楊家将の物語で活躍する女武将・楊宜娘の祖型が出現したと考えられるのである。[一三]

播州楊氏の楊家将を利用したこうした自己宣伝の動きは、歴史上の太原楊氏の楊文広が儂智高征伐に従軍していたと記録されていたことも関係して（『宋史』巻二七二「楊文広伝」）、その後も高級文人との交流のなかで広まっていく。例えば、柳貫の門弟でもある元末明初の宋濂（一三一〇～八一）がなした「楊氏家伝」（『翰苑別集』巻一）には、播州楊氏の一族内に楊文広という名の人物がいたと記されており、この宋濂の文章は明清を通して広く読まれていた。こうした播州楊氏に関わる記述が、歴史上の太原楊氏の楊文広の事跡と重ねられることで、楊文広の南征物語の拡大を後押ししていたと考えられるのである。

ここで、播州楊氏と楊家将の物語の関係を整理すると、――①高級文人とのつきあいのなかで、②系譜を創作して楊家将の末裔を自称し、③絵画や詩文を活用して戦功を喧伝し、④結果、楊家将の通俗文芸の形成に大きな影響を与える、――という構図が見て取れるだろう。そして、これと酷似する構図は、明の武人一族・六合楊氏の動きの中にも見える。

（3）明の六合楊氏と楊家将の物語

播州楊氏と楊家将物語の関係は、王世貞（一五二六～九〇）『宛委餘篇』巻六においても言及されている。王世貞は、市巷で楊文広が南征して「陥」ったとのデタラメな「俚歌」が唱われているのは、播州楊氏の存在が関係しているとほのめかすが、注目されるのは、これに続けて、明の楊洪、楊俊、楊信、楊能ら一族を、楊業らに附会して「楊家将」と称するのは論ずるに足りない、と喝破していることである。[一四]王世貞が風説を論難するこの楊洪（一三八一～一四五一）らこそが、六合楊氏である。

六合楊氏は、土木の変での対応を景泰朝より顕彰された楊洪の時代から、高位を得るようになった武人一族である。一族で辺境守備に功を挙げた彼らは、楊洪が昌平侯となり死後に穎国公を追贈されたのをはじめ、息子の楊俊（？～一四六四）が昌平侯を襲爵し、甥の楊能（？～一四六〇）は武強伯に、甥の楊信（？～一四七七）は彰武伯を賜わるなど、「洪父子兄弟皆佩將印，一門三侯伯（楊洪ら父子兄弟は皆な将印を佩び、一門は三侯伯となった）」（『明史』「楊洪伝」）との栄達を得た。

かくて武事にまつわる功績とともに名声を得た六合楊氏であるが、一方で、楊洪が文学を好んでいたこともあってか、[一五]于謙（一三九八～一四五七）、陳循（一三八五～一四六二）、楊栄（一三七一～一四四〇）、王直（一三七九～一四六二）ほか多数の高級文人と交流があった。このなかで、彼らは播州楊氏が創作した系譜を利用して楊家将の末裔を自称するようになり、絵図・題詩や文などを高級文人に作成してもらいながら、自らの戦功を喧伝した。

例えば、楊洪の息子・楊俊は、父の死に際して文淵閣大学士で戸部尚書の陳循に神道碑の作成を依頼し、六合楊氏が播州楊氏を経由した太原楊氏（すなわち楊家将）の末裔であるとの系譜を記してもらっている（『芳洲文集』巻七の楊洪神道碑銘）。この陳循は、土

木の変後に景泰帝の即位詔を起草した人物であった。また、楊洪の死に際しては、武功を顕彰すべく肖像画も作成されたが、その画賛を書いたのは、土木の変後に景泰帝の即位を実現させた兵部尚書の于謙であった。于謙の賛では、楊洪の将帥としての資質が関羽や張飛などに擬えられながら称えられている[二六]。

さらに、楊洪に次いで名が知られていた甥の楊信も、その武功を絵画（佚）と題詩で喧伝している。絵画（佚）に附される題詩「凱還図為総兵官彰武伯楊公題」（『襄毅文集』巻二）をなしたのは、楊信が鎮大同となった天順四年（一四六〇）に大同の巡撫となった韓雍（一四二二～七八）であり、韓雍は陳循とも繋がりをもつ人物であった。興味深いのは、韓雍が詩中で、楊信が対モンゴル戦で挙げた武功を「…西夏爲奸驕，將軍往節度…（…西夏は邪にも軍馬を起こし、楊将軍は抑えに向かった、…）」と、西夏征伐（征西）に擬えながら称揚していることである。明の当時に存在しない西夏を引き合いに出しての武功の称揚は、楊家将の西夏征伐物語（征西物語）を意識してのことだと考えてよいだろう。

こうした、六合楊氏の楊家将の物語を利用した自己宣伝という現実社会での動きは、さらに環流して虚構の通俗文芸の形成に影響を与えていた。〔明万暦年間？〕『于少保萃忠伝』（以下、『于少保』）十巻七十回は于謙の事跡を小説にしたものであるが、土木の変が語られる第二十九回「楊俊力抜千年椿、于公銃打万胡人」では、六合楊氏が明の「楊家将」と称され活躍する様子が描かれているのである。

この回ではまず、宦官の喜寧の捕縛を于謙が楊俊に託す場面が描かれるが、そこでは「尋思要擒毒賊喜寧，除是楊家将楊俊方可（思うに、毒賊の喜寧を捉えられるのは、楊家将の楊俊をおいて他はないだろう）」というように、楊俊が楊家将と称されている。さらにこれに続けて、楊洪・楊俊親子の武力を示す英雄譚が複数描かれるが、それらの英雄譚のなかには、モンゴル兵（韃子）に「楊家将軍」と畏れられる楊俊が、「李陵台」に漢代以来ささり続ける「鉄椿」を抜くことでモンゴル兵を帰服させる筋書きも見える。「李陵台」は、楊業が「李陵碑」に頭をぶつけて自死する『北宋志伝』『楊家府演義』といった楊家将小説の話を想起させる象徴的な名前であり、また、『于少保』では楊俊がくり返し「楊家将」「楊家将軍」と呼ばれていた。これらのことに鑑みれば、現実社会で楊家将の物語を利用しつつ楊家将の末裔を自称していた六合楊氏の姿は、やはり楊家将の物語と関わりながら虚構の通俗文芸に組み込まれていたと指摘できるだろう。

ここで、六合楊氏と楊家将の物語の関係を整理すると、――①高級文官とのつきあいのなかで、②系譜を創作して楊家将の末裔を自称し、③絵画・詩文および物語を活用して戦功を喧伝、④結果、その形象が明の「楊家将」として通俗文芸の反映される――という構図が看取されるだろう。この構図は、播州楊氏と楊家将の物語の関係に見えたものと、まさに酷似するものである。

（4）代州楊氏と楊家将の物語

播州楊氏と六合楊氏という武人一族と、虚構の物語の間で生じた環流の関係は、山西の代州楊氏という明後期の宗族の社会的な動き

にも影響を与えた。[一七] 嘉靖年間ごろ、山西の代州楊氏は、播州楊氏および六合楊氏の系譜と、当時流行していた楊家将の戯劇など通俗文芸の登場人物の系譜を利用して、自己の系譜を創作し宗族を拡大したのである。この現象には、一つには嘉靖年間に生じた宗族の拡大化の動きが関係しているが、[一八] もう一つには、彼らが居住していた代州という地域が、当時入寇を繰り返していた「北虜」アルタンの侵入経路となっていたことが関係している。[一九] 嘉靖二十一年の大侵入の際には「男女二十餘萬」が殺戮されたと記録されるほどのアルタンの入寇は、代州楊氏にとってみれば紛れもなく厄災であった。そのため彼らは、「北方の敵」を打ち破った「楊家将」という成分を自己の系譜に取り込むことで、北方の脅威から自らを守ってくれる心理的支柱を構築したと考えられる。

こうした状況のもと、代州楊氏は、播州・六合の両楊氏の系譜と楊家将の戯劇の系譜を併せて自己の内部に取り込んだと考えられるが、この現象は、播州・六合の両系譜が嘉靖当時にすでに通俗文学とかなり融合していた可能性を示しているだろう。王世貞が、楊文広南征の物語と播州楊氏の系譜の関係を説明し、これに続けて六合楊氏を楊家将と見なす風潮の存在を論難したことも、この可能性を裏付けていよう。

三、絵画と詩文と「武」の物語

このように、播州楊氏・六合楊氏という実在の武人一族の社会的な動きと、楊家将の物語という虚構の通俗文芸は、相互にフィードバックをしながら拡大していき、さらにまた別の代州楊氏という実在の宗族の社会的な動きに、恐らく虚実の皮膜が曖昧なまま、影響を与えていた。

興味深いのは、播州・六合楊氏が通俗文芸にも影響を与えた自己宣伝を行う際、視覚伝達力に優れた絵画と、それに付随する詩文を積極的に利用していた、ということである。そして、絵画と詩文の組み合で思い起こされるのは、成化説唱詞話といった絵入の説唱系文芸であろう。

そもそも楊家将の物語と絵図や説唱の繋がりを示す資料は複数ある。例えば、葉盛（一四二〇～七四）『水東日記』巻二一「小説戯文」は、成化の当時「楊六使文広」の絵入りの「小説雑書」が南方の書肆で販売され、「農、工、商販」はこぞってこれらの絵図を抄写し、とくに「痴呆婦女」がこれを好んでいたので、「女通鑑」とも呼ばれていた、との記録を残す。

また、一部に挿絵が残る説唱文芸の成化説唱詞話には、楊文広の征南についての言及が複数みえる。例えば、成化説唱詞話『張文貴伝』では、「武官好个楊文廣，正是擎天柱一根。收了九溪十八洞，滅得蠻家化作塵。（武官はあっぱれ楊文広、正しく支えの擎天柱。南蛮の九渓十八洞を収め、蛮族を塵のごとく滅ぼした）と唱っている。楊文広征南への言及は成化説唱詞話の『仁宗認母伝』、『包龍図断曹国舅伝』にも見え、説唱系の文芸でこの題材が好まれていただろうことを示している。このことは、元末の劉夏（一三一四～七〇）が至元二十七年（一三六七）に献策した文で、民間で行われる楊文広や花関索の詞話・艶曲を禁絶すべきだ、と述べていることからも見て取れる（『劉尚賓文続集』巻四「陳言時事五十条」）。

こうした状況が元明を通して存在したことは、播州楊氏の自己宣伝の結果が、遠くは絵入り文芸や説唱文芸などに一部姿を変えていたことを示していよう。ならば、播州楊氏や六合楊氏が自己宣伝に用いた絵画と詩文自体も、その韻文を詠ずれば、絵入りの説唱文芸のようなものとなり得た可能性があるのではないだろうか。例えば、楊信の武功を称える韓雍「凱還図為総兵官彰武伯楊公題」の冒頭では、

楊將軍不易得，虎頭燕頷脩髯黒，河目龜文神氣赤，三光五岳儲精華，生與皇家爲柱石，少事世父穎國武襄公，六韜三略皆精通，手提百斤武庫戟，臂挽三石烏號弓，…

楊將軍は得がたき人物、虎の頭に燕の頷（おとがい）蓄える髯（ひげ）は黒く、平らく長き目（まなこ）に亀甲紋の足もち神気は赤い、三光五岳精華を湛え、生まれながらに皇家の柱石、若きころより大伯父穎国武襄公につかえ、六韜三略みな精通す、手に提げるは百斤の武庫戟、腕（かいな）に引くは三石の烏号弓、…

と、説唱や白話文学にも似た武人の描写がならんでいるのである。このことは、絵画に詩文を組み合わせた武人たちの宣伝手法が、物語化に繋がる可能性を孕んでいたことを示していよう。こうした形式ならば、文字のあまり読めない中・下級の識字層や、非識字層にも、彼らの武功を感性に訴えながら効率的に広めることができたはずである。もし、この推論に妥当性があるならば、通俗文芸に絵画を組み合わせた彩絵『大宋』や彩絵『征蛮伝』が、宦官たちの自己宣伝に利用された可能性があることも、これと地続きの現象として捉えることができるだろう。

おわりに

このように、宋の武人や武事を題材とする楊家将や岳飛の物語の形成・受容の過程には、実在の武人・武官と、その周辺の文官、そして宦官が関与していた形跡が複数見えた。そして、その関与の仕方は、儂智高の乱、西南諸族の反乱、土木の変、「北虜」の侵入といった各時代の現実社会で生じた武事と連動するものであり、また、地位の上昇や宗族の保存のために武事に関わる功績を宣伝するという、武人や宦官たちの現実における動きと連動するものであった。ならば、こうした過程のなかで形成・受容されてきた「武」の物語には、武人や宦官など、これまで文字の世界に表出することの少なかった人々の視点や声がかなり反映されていたはずである。そうであるならば、少なくとも「武」にまつわる物語を読み解くには、従来の文学の担い手であった知識人男性の視点だけでなく、現実社会において「武」に関わってきた武人・武官や、その結節点に姿をみせる宦官などの視点を充分に考慮する必要があるだろう。

《注》

（一）石昌渝「朝鮮古銅活字本《精忠録》與嘉靖本《大宋中興通俗演義》」（『東北アジア研究』二、一九九八年三月）、大塚秀高「歴史演義小説の図像の淵源」（『埼玉大学紀要（教養学部）』四七（二）、二〇一二年三月）、涂秀虹『精忠録』（上海古籍出版社、二〇一四）所収「前言」。

（二）『精忠録』鮮銅活字本及び『大宋』附『精忠録後集』所収の徐有貞「湯陰鄂王廟記」。

（三）『精忠録』及び『精忠録後集』所収の陳銓「重刊精忠録序」、同所収

の屠滸「重修賜忠烈廟記」、『精忠録後集』所収の李春芳「重刊精忠録後序」及び王華「重修敕賜忠烈廟記」。

（四）上原究一「『大宋中興演義』と『皇明英烈伝』の王少淮双面連式挿絵本をめぐって」（『中国古典文学挿画集成（十）小説集〔四〕』、遊子館、二〇一七）、松浦智子「明代内府で受容された宋の武人の絵物語―とくに岳飛の物語から」（『宋代資料への回帰と展開（仮）』、汲古書院、二〇一九年九月刊行予定）。

（五）普及本である清道光二十五年刻『海山僊館叢書』所収の『酌中志』二十四巻本は「出像」の語を「畫像」に作る。本稿が記した「出像」の語は、清康熙内府鈔本『酌中志略』二十二巻（北京故宮博物院蔵）に基づくものである。

（六）『酌中志』巻一六「内府衙門職掌」「司礼監」及び「御用監」。

（七）板倉聖哲「明代絵画の構図」（『故宮博物院④明の絵画』ＮＨＫ出版、一九九八）、趙晶『明代画院研究』（浙江大学出版、二〇一四）他。

（八）『酌中志』巻一六「内府衙門職掌」「東廠」。

（九）前掲（四）の松浦論文参照。

（一〇）松浦「東洋文庫蔵『出像楊文広征蛮伝』について」（『稲畑耕一郎教授退休記念論集・中国古籍文化研究』下巻、東方書店、二〇一八）。

（一一）柳州城。宋楊文廣征蠻、曾陥入此城、後得妹宜娘用計救出。此載『征蠻傳』。

（一二）詳細は、前掲（四）松浦論文参照。

（一三）松浦「楊門女将「宜娘」考―楊家将故事と播州楊氏」（『東方学』一二一、二〇一一年一月）。

（一四）本朝楊武襄洪、子俊、從子信、能，俱有威名。故人以附會業、延昭輩，稱楊家將，却不足論。

（一五）『明史』「楊洪伝」：「…（楊洪）又頗好文學，嘗請建學宣府，教諸将子弟子。…」。ただし、楊洪と同世代の文人とのつきあいは、土木の変と景泰帝の即位に際しての対応から生じた側面の方が強そうである。

（一六）『忠肅集』巻一二「潁國武襄公楊洪畫像贊」：「…知其内者以爲孫、呉、管、樂，識其外者以爲衛、霍、關、張，…」

（一七）以下、代州楊氏と楊家将の関係については、松浦「楊家将の系譜と石碑―楊家将故事発展との関わりから」（『日本中国学会報』六三、二〇一一年十月）を参照。

（一八）井上徹『中国の宗族と国家の礼制』（研文出版、二〇〇〇）第四章「夏言の提案―明代嘉靖年間における家廟制度改革」、臼井佐知子「明代徽州における族譜の編纂―宗族の拡大組織化の様相」（『宋―明宗族研究』、汲古書院、二〇〇五）。

（一九）『明世宗実録』巻二三六、同二六四、『明史』巻三二七「韃靼傳」。